

## 赤十字グループの現状とこれからの取組み



日本赤十字社医学会理事長・日本赤十字社医療事業推進本部長

とみた ひろき  
富田 博樹

### 【略歴】

- 1973年 3月 東京医科歯科大学 医学部医学科 卒業
- 1973年10月 武蔵野赤十字病院 脳神経外科
- 1976年 7月 国立立川病院 脳神経外科
- 1977年 7月 ニューヨーク大学 脳神経外科レジデント
- 1979年 9月 東京医科歯科大学 医学部脳神経外科 助手
- 1984年 7月 武蔵野赤十字病院 脳神経外科 副部長
- 1994年 4月 武蔵野赤十字病院 救急部 部長(兼務)
- 1999年 4月 武蔵野赤十字病院 脳神経外科 部長
- 2007年 7月 武蔵野赤十字病院 副院長
- 2008年 1月 武蔵野赤十字病院 院長
- 2012年 4月 日本赤十字社 事業局 局長
- 2016年 4月 日本赤十字社 医療事業推進本部 本部長

### 【他現職等】

- 医学博士
- 脳神経外科学会認定専門医
- 日本臨床倫理学会 副理事長
- 学校法人日本赤十字学園 常務理事
- 日本神経救急学会 名誉会員

赤十字病院は、日本赤十字社により明治19(1886)年に東京にまず設立され、その後、明治時代に8病院、大正時代に18病院、昭和の第二次世界大戦前に30病院、そして戦後に35病院と総病院数92の病院グループであり、創立100年を超える病院が15病院と日本を代表する歴史のある病院グループである。

我々赤十字病院は、世界の赤十字社に共通する理念である7原則(人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性)を掲げ、Mission Statementは「わたしたちは、苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守ります。」である。人道(人間のいのちと健康、尊厳を守る)の実践そのものが我々のバックボーンとなっている。

赤十字病院設立の大きな動機は、救護活動に活躍できる優秀な看護師の養成が一義的な目標とされ、日本赤十字社は明治以降の我が国の看護教育と養成に多大な貢献をしてきた。看護師の社会的な評価を高めたのも、赤十字看護教育の賜物である。赤十字病院創立以降、赤十字看護教育を受け、高い能力を持った看護師が赤十字病院グループ発展の大きな原動力になったことは、歴史的な事実として書き留める必要がある。

赤十字病院グループの総病床数は36,000床を超え、3県を除く全都道府県に展開している。大規模病院が多くを占めていることも特徴であり、46%(43病院)が、国が大規模病院と規定する400床以上である。大規模病院中心に、救命救急センター:34病院、がん拠点:37病院、周産期母子医療センター:43病院、大学付属病院相当の診療活動と認められたDPC特定病院(旧II)群:19病院と高度・急性期医療を担っている。一方、200床未満の小規模病院も21病院あり、これらの病院を中心に、赤十字病院グループは地方の医療過疎地の医療を懸命に支えている。

我が国の病院数の約8割は民間病院であり、残り2割が公立(主に自治体立病院)・公的病院であり、我々は公的病院に属している。公的病院の代表的な3団体は、日赤、済生会、厚生連であり、それぞれ、公的病院として、民間病院では行えない高度・急性期医療および僻地医療を担う事を期待されている。特に赤十字病院グループは赤十字の理念の元、次の5つの事業を国民に約束している。それは①地域医療、②公的(救急・僻地)医療、③国内災害救護、④国際活動、⑤看護師養成である。これらの活動の詳細については講演で紹介する。これら我々の活動は国民から、そして世界から高い評価を得ており、赤十字病院グループが、我が国のどの病院グループと比べても、我が国のみならず世界においても、特別な高い価値のある貢献をしているグループである所以である。

我が国は、今まで人類が経験したことがない深刻な少子高齢化社会に突入しつつある。その状況下で、現在の医療・介護制度を維持発展させるために、大規模な病院機能の再編成が行われている。そして、病院に求められる役割も大きく変化してきている。

そのような状況下で、これから我々赤十字病院グループが取り組まねばならない方向性について、赤十字病院グループの財務状況も含めてお話しさせていただく。